

ドルトによる子どもの新しい教育(Ⅲ)

山中 哲夫 (愛知教育大学外国語教育講座)

(2006年10月2日受理)

La nouvelle éducation de l'enfant selon Dolto (Ⅲ)

Tetsuo YAMANAKA (Department of Foreign Language, Aichi University of Education)

要約 男の子の失禁は心理的なもの。括約筋によるコントロールが性器的なもの結びついているため。「欲求」と「欲望」の混同。男の子における夜尿症の心的特殊性 / 核家族化が進む中で教師の役割。子どもが学業に失敗したときの対処法 / 兄弟姉妹は別個の存在。兄姉は弟妹の親代わりになってはいけない。近親相姦の危険な陥穽。模倣は有害。父親と母親の役目。

Keywords : 排尿と勃起, 欲求と欲望, 信頼と会話

おもしろし

ドルトはさまざまな機会をとらえて、下の躰について詳細に言及しているが、それはこういった躰の在り様が人間の精神発達上、重要な意味を持っているからである。単に子どもの心の発達という以上に、人間一般において、この時期の躰の方法が精神形成上、のちに決定的な要因となるからである。ここではしかしながら、紙幅の関係で簡単な紹介にとどめざるを得ない。いずれ詳しく触れたいと考えている。

よく知られているように、一般的に女の子の方が男の子よりも早くおむつが取れる。19ヶ月から20ヶ月で昼間の失禁はなくなる。男の子の場合は24ヶ月以上かかる。いずれにしても、昼間の失禁がなくなって3ヶ月後に夜尿もなくなる。ただしこの場合、おねしょを悪いことだと子どもに思い込ませなければ、という条件がつく。おねしょを悪いことだと思込ませると、かえって夜尿は長引く。

完全に失禁がなくなるのは男の子の方が遅い。

その理由は、“propreté”(失禁しないこと)は括約筋によるコントロールと関わるものだが、このコントロールが女の子と男の子では発達に相違が見られるからである。括約筋は生後10ヶ月頃から発達しはじめるが、実際に男の子において、この種のコントロールは22~24ヶ月以前では無理である。なぜ発達が遅れるかといえば、女の子の場合、括約筋によるコントロールが性器的なもの無関係であるのに対して、男の子の場合、性器的なもの深く結びついているからである。つまり男の子の場合排尿と勃起の区別がつかないのである(子どもでも勃起する、もちろんそれは大人とは異なっているが)。排尿と勃起との区別がつか

ないということは、精神的に言えば、「欲求」(besoin)と「欲望」(désir)の区別がつかないということに他ならない(この二つは精神医学者の間でもよく混同されている)。簡単に言えば、おなかが空いた、おっぱいがほしい、オムツが汚れた、取り替えてほしい、という要求、これが「欲求」であり、お母さんと寝たい、お母さんを自分のものにしたい、これが「欲望」である。前者は満たしてやらなければならないが、後者は満たしてやってはならないのである。

男の子において夜尿は特別の意味を持っている。眠っているときに勃起が起こる。次いで無意識裡に母親との近親相姦の恐怖が生じる。排尿することで自らを去勢する。つまり勃起を中断させるわけである。漱石が寝ぼけて縁側から放尿する話があるが、これもその一例だろう。彼はその後と誤って庭先に落ち足を挫くのだが、これはいわば二重の去勢である。伝記作家シフによればサン=テクジュベリは半ば性的不能者であったようだが、確かに母親や一族の女性たちの圧倒的な支配の下で早期に去勢されていて、おそらく下の躰においても、彼は重大なトロマチスムを蒙っていたらうと推察される。

学業の心配

現在の親や教師は子どもの学業を大変重要なものと考えている。子どもにとって学校がすべてと思っている。不登校の子どもやその親の苦しみは、したがってきわめて深刻なものとなっているが、子どもの知識獲得に学校がすべて、という時代は次第に過去のものとなりつつある。知識を与えてくれるメディアが町に氾濫し、性情報に早く触れることで、初潮が早まってい

ることもその一例であろう。

今日の教師はもはや単なる教育者ですまなくなっている。核家族化が進んで、もはや教えられなくなってしまう教育を施す者、知識を教える以上の存在になってきている。いわば子ども一人ひとりの個別的な人生の教育者としてその存在が問われている。

確かに教師は心理学の教育を受けている。しかし講義によって子どもと大人の関係の意味を獲得できるものではない。フランスの昔の田舎の小学校では、教師も子どもたちも大家族の中で育てており、教室も6歳～13歳までの子どもたちをグループ分けして一つのクラスに入れていた。これは年齢分けではない。現在の都会の子どもたちは大量生産の卵の規格のように、戸籍上の年齢で区分されているが、情動的年齢は戸籍上の年齢とは異なる。言うまでもなく、教育はこの情動的年齢において行われるのであって、戸籍上のそれではない。同じクラスでもある子どもは情動的に2歳半程度の発達しかなく、別の子どもは10歳程度に達していることはよくあることである。この二人を同列に扱うことはむろん無理な話である。

子どもが学業に「失敗」したとき、親や教師はどう対処すべきか。真正面からしっかり受け止め、冷静に正しく判断することである。ドルトによれば、次の三点を心にとどめておくべきであるという。すなわち、①学業の失敗は別のことがうまく行っていない兆候であること②子どもを非難してはいけない③教師は子どもや親の勇気を挫いてはいけない。③について補足すれば、例えば教師が、こんなことではあなたの子どもの将来はだめになる、不幸な人生を歩むことになる、落伍者になる、などと言って、さらに暗い子どもの将来を予想して、子どもや親の希望を打ち砕くことなどを示している。こういう言葉は子どもの自信を失わせ、立ち直るチャンスを奪うようなものであるとドルトは言っている。

性格、社交性、手先の器用さ、運動能力、イニシアティブを取る精神、協調性、こういったものもまた、生活(人生)には必要不可欠なものである。学業(成績)よりもずっと重要なことである。

兄弟姉妹関係

兄弟姉妹関係は勉学の面でも大変重要な意味を持っているが、親として守るべきいくつかの鉄則がある。第一に、下の子を上の子から守ってやることである。これは逆に言えば、上の子を下の子から守ってやることにもなる。弟妹は兄姉に対して当然能力的に劣っている。差がある。しかし兄姉はそのことを知らない。弟妹も兄姉と同じようにしようとする。

むしろ、弟妹は兄姉がいても、出来るだけ同じ年頃の子どもと遊ぶべきである。もちろん兄姉と付き合う

必要性はあるけれども。

一方、兄姉は弟妹に対して責任を持ちたがるが、それはその子本来の役割ではない。その役割は親が担うべきものである。兄姉が弟妹に対して責任を担おうとすると、兄姉自身の健全な精神発達を阻害し、弟妹にも有害となる。つまり、戦前から道徳的に立派とされてきた、「父親代わりの兄」「母親代わりの姉」は精神医学的には好ましい状態ではないのである。なぜならば、無意識のレベルでは、兄姉は弟妹の誕生を願っていない(同性の場合は特に一異性の親をめぐってのライバル関係になるので)からである。ほしくはなかった弟や妹に対して責任を負わされることは、やがて嫉妬や憎悪を生み出す。これが無意識の中に抑圧されると、神経症や抑うつが引き起こされる。

弟や妹にとって父親・母親は確かに必要だが、しかし必ずしも兄や姉がいる必要はない。ある年齢までは、兄や姉に父親役・母親役をさせないようにすることが重要である(この年齢をドルトは16歳あるいは17歳としている)⁽¹⁾。

もし兄や姉が自ら進んでその役割を担おうとする場合、この行為を褒めてはいけない。むしろ残念なことと考えるべきである。兄弟仲が良いに越したことはないが、たとえ悪くても、単にそれだけのことであって、それ以上でもそれ以下でもないのである。

ドルトはくり返し言っているが、16、17歳になるまでは上の子は下の子の親代わりになってはいけない。16、17歳になれば、上の子は自己の権利、義務、責任と、誤った権力行使とを混同しなくなる。

親が守るべき鉄則としてはこの他に、子どもの告げ口に翻弄されないこと、である。親が自分でその現場を見たわけではないのだから、軽率に判断してはいけない。弟妹が兄姉のほら話を伝えている場合もある。またたとえそれが真実のものであったとしても、取り合わないことである。つまり裁判官になってはいけないということである。

“お兄ちゃんがぶった!”

“お兄ちゃんがそんなことをしたの?お兄ちゃんは自分の力が強いことも、あなたが小さくて弱いことも知らないのよ”(母親の言葉)

上の子の言い分—“だって、弟がひどいことをしたんだ、ぼくのものを取ったんだ”

— “本当にあなたには楽しい遊び相手がないいわね”

決してどちらか一方が正しいと決めつけてはいけない。最後にはすべてうまくゆくようになっているのだから。喧嘩のことをいつまでも話さないことが肝要である。

仲間やいたずらっ子の告げ口を両親にする子どもがいる。この場合相手に嫉妬していることがある。つまり相手のような自由闊達さや大胆さを自分も持ちたい、

相手の父親や母親のような親を持ちたい、という願望の表現である。仲間が悪いこと、禁止されていること、無謀なことをしていると、必ず大人（多くは教師）に報告に来る子どもがいる。一般にそういう子どもは自分の親からあまり構ってもらっていない。

兄弟姉妹関係あるいは友人関係で、ドルトが力説しているのは、模倣はよくない、ということである。悪ガキは確かに悪い見本である。しかし少なくとも危険を引き受けたという点では、彼はリーダーである。悪い見本である彼は叱られるべきである。だがそれ以上に、それを真似た者はさらに強く叱られるべきである。なぜなら、模倣は人間らしさの対極にあるものだからだ。

“弟をごらんさい。彼のようにいい子にならなくちゃ”

“誰それさんの息子さんを見なさい、誰それさんのお嬢ちゃんを見なさい”

親はよくそう言う。まるで、親自身が、他の子どもを生みだかった、と言っているかのようである（現実にそういう場合もあるだろう）。

“うちの子はいい子なのですが、悪い仲間には引きずられて…”

しかしこれは言い訳にはならない。引きずられることは、悪い仲間がやったこと以上に悪いことであるからだ。

兄弟姉妹関係に戻ると、上の子と下の子の個別化をはっきりと行うことが、もっとも重要なことである。同性間の場合もこれは必要なことで、上の子が下の子の親代わりになっていることがあるからである。その場合はっきりと言葉で言うことが大切である。

“お姉さんをあなたは手本にしているけど、あなたはお姉さんではないのよ。あなた方は違う人間なの。違ったふうに育ててゆく。もし「お姉さんのように」育てて行きたいってあなたが願っているんなら、自分らしく育てて行きたいって思うより、ずっと成長しないわよ。お姉さんより、他のお友達を見つけなさい”⁽²⁾

兄弟姉妹間では、往々にして、支配する者と支配される者とが分ちがちがたく癒着する。これは、互いのそれぞれの社会的発達にとって有害である。両親はこの弊害を予防しなければならない。それには、兄弟を見習いなさいと言わないことが大事である。

子どもの欠点の直し方

欠点の矯正に関して子どもと争ってはいけない、というのがドルトの考え方である。長所を伸ばす形で矯正してゆくわけだが、その際に大事なことは、まだ欠点にまで至っていないものを、欠点と決めつけないこと、である。例えば、好奇心が旺盛だったり、食いしん坊だったり、おしゃべりだったり、落ち着きなく動き回ることは、これはまだ欠点ではない。これらに対

しての大人の接し方一つで、長所にもなったり短所にもなったりする。大人がそれらを非難めいた口調で言ったり、叱ったりすると、子どもはそれらを自分の欠点だと思ひ込むようになる。これらは本来自発的に現われたもので、したがって伸ばすべきものである。

好奇心は、知りたいという願望が表われたもので、将来、学者や科学者やルポライターあるいはジャーナリストに彼はなるかもしれないし、食いしん坊は微妙な味の識別へと導いてやれば、料理が巧みになり、コックや料理研究家になれるかもしれない。あるいはまた、おしゃべりはコミュニケーションへの指向が表われたもので、アナウンサーや俳優、通訳といった職業に就けるかもしれないし、活発さはスポーツやゲームでからだを動かす原動力となるもので、その方面で立派な職業に就けるかもしれない。アインシュタインは9歳まで読み書きができなかったと言われている。読み書きができないことが欠点ではなかったのである。

それはともかく、たとえ欠点であったとしても、その欠点を強制的に改めさせようとする教育、これは明らかに有害である。何かしようとする子どもの自主的な気持を萎えさせてしまう。星の王子さまはそうやって画家の道を大人たちによって断念させられてしまった。欠点を強制的に改めさせようとすることは、子どもを意気阻喪させるばかりでなく、悪意ある意識を植えつけることにもなる。さらに厄介なことに、子どもを不幸なナルシズムに陥らせる。

子どもの自然な行動を非難することは、子どもの性格の調和をゆがんだものにしてしまうのである。

どんな子どもでも、本来子どもは子どもなりの価値を持っている。親たちは、子どもはまだ幼いのだということを認めてやらなければならない。自分の長所を子どもに気づかせ、それを伸ばす手助けをすべきである。

長所を土台として短所を矯正してゆくわけである。これが子どもに自信を植えつける。俗に「褒めて育てる」と言われていることが、これである。

私見によれば、日本では、しかしこれは難しい。なぜかと言えば、親自身が褒めて育てられていないからである。子どもの欠点にしか目が行かないのは、親自身が自分の欠点にしか目が行ってないからである。つまり子どもに自己を投影し、そうやって同一化しているからである。

家族の外で子どもが作る人間関係、つまり友だち関係は、大変重要なものである。自分とは違った子どもがいること、自分の家庭とは違った家庭があること、これを知ると子どもを大いに発達させる。たとえそれが悪い仲間であったとしても。もともと「悪い」という考えは、相手の服装や言葉遣いなど外見的なものを口実に、先入観によって親が作り出した主観的なものに過ぎない。子どもの行動について、大人の基準

で善悪を判断したり、抽象的、絶対的な判断を下したりしてはいけない。

善悪の判断は子ども自身がやるべきである。子どもが嫌っている相手と付き合うように強制してはいけないし、好きではないスポーツや芸術を押しつけてもいけない。これは子どもの人格にとってきわめて危険なことである。ある種の子どもは親の気に入るようにそれに従うだろう。親の気に入るように行動することは、人間疎外を引き起こす。あとに大きな問題を抱え込むことになる。

反抗する子どもはまだ救われる。そうやって自己の主体性を守っているのだから。

子どもをコントロールするとはどういう意味か

子どもをコントロールするというのは、もちろんロボットのように自由に操ることでもなく、野生動物のように飼いならすことでもない。子どもをコントロールするとは、子どもを信頼し、できそうなことは子どもに経験させ、両親との信頼関係の中で子どもに何でも話させ、自己/他の子ども、自己の家庭/他の家庭の相違点について話し合う、ということである。これがコントロールの意味である。そのようにして育てられた子どもは、9、10歳頃から男の子も女の子も、偏見なしに社会生活を営めるようになり、相手に失望したり、隷属したりせずに、他の子どもと友情関係を結べるようになる。そうやって自己に対する信頼も獲得してゆくのである。

自己に対する信頼は、家族に対する信頼に根ざしたものである。

そうやって育った子どもはまた、自分と異なる人々を受け入れる寛容さを持つことができるようになる。

因みに、相手に失望するというのは、相手を過度に理想化している証拠であり、その理想化した相手に裏切られ、同一化が失敗した結果、失望は憎しみへと変わってゆく。恋愛関係においてよく見られる症候である。また隷属は、退行的ナルシズムの表われであり、社会性を失ってゆく危険性がある。

家族の中で何でも自由に話せることが基本だが、しかしそれがすべてではない。9、10歳になると、家族にすべてを話すようなことはしなくなる。これは望ましいことである。すべてを話さない、ということは、子どもが自分で自分の責任を負っているということを示している。

両親が子どもの行動を逐一監視したり、子どもに失望したり、といった姿を見せなければ、ちゃんと育ててゆく。子どもにも自分で解決できない試練がやってくる。そういうとき、子どもが助けを必要としたとき、子どもは一方の親を相談相手に選ぶ。それはもう一方の親に洩らさないという確信があるからである。

相談相手に、男の子は父親を、女の子は母親を選ぶ。逆であってはいけない。さらに、第三の人物の重要性について前に述べたように⁽³⁾、相談を受けた親は、子どもにこう言ってやるべきである — “そのことはお母さんにも話してみるべきだよ。よいアドバイスをくれるよ” “お父さんにも言うべきよ。信頼していいのよ”

親がもう一方の親を否定して子どもを支えてはいけない。

また、大事なことで、もう一方の親に秘密にしておくこともよくない。

重要なのは、ただ一人の相談相手だけの意見に子どもを従属させてはいけない、ということである。羅針盤の針は二つあるべきであり、両親の意見は違って当たり前なのである。

父親と母親の精神的イメージ

子どもを受胎するには三人が必要であるとドルトは言っている。その三人とは、父親、母親そして子ども本人である。受胎は受胎される子どももその要因となっている、という一見奇異な、神秘的な考え方だが、これは、無神論者が多い精神分析医にしてはめずらしく、彼女がカトリック信者であることから来ているのかもしれないが、それはともかく、受胎には三人の存在が不可欠であるのと同じく、誕生時にも三人の存在が必要で、さらに教育においても三人が必要である、と彼女は言っている。親がこのことを忘れていても、子どもは決して忘れていない。三人による教育がなされなければ、子どもの精神病の芽にすらなる、幸いにして実際に精神病になる例は少ないが。

母親に寄生する子どもがいる。これは子どもの問題ではなく、母親の問題である。こういう子どもの母親は夫を男として認めていないことが多い。子どもに寄生をやめさせる方法は、したがって、子どものライヴァル(父親)に関心を寄せることである。父親は、子どもにとっての父親像を抱かせる必要がある。父親とはそういった機能を持つべき存在であるからだ。

ではその父親像とは、いったいどんなものか?父親とは、①法律違反を教える者②社会的な発達を支える者③金銭を与える者、これが子どもの心に植えつけるべき父親のイメージである。一言で言えば社会性のシンボルである。金銭は非常に重要な、象徴的な意味を持っている。社会的交換物であり、力のシンボルでもある。社会的な規範の枠内で金銭を得たり使ったりという、健全な外的行動を子どもができるかできないか、父親はその責任を担っているわけである。

一方、母親像とはどんなものか?母親とは、食べ物を与える者、世話をする者、である。一言で言えば、「欲求」(besoin)を満たしてやる者、である。また傷

ついたからだや心を看病してくれる看護“婦”のイメージである。小学校で父親的なものとぶつかり、くじけた子どもの世話を家庭で行うのが母親の役目である。しかし母親は四六時中子どもの世話をしてはいけない。子どもに関わるものとは別の活動をして、子どもから離れる必要もある。

大切なことは、社会の中に母親的なものが侵入してこないようにしなければならない、ということである。私見では、本来父親的世界であるべき社会の中に、日本では母親的なものが数多く侵入してきて、子どもの社会的自立を遅らせている傾向にある。受験、就職、結婚などで母親的な世話を焼きすぎているように思われる。

ともかく、「指導する者としての父親」と「慰め癒す者としての母親」というこの二つの心像が子ども自身の内に形成されれば、やがてぶつかる思春期のさまざまな困難な問題を乗り越えることができる。少なくとも乗り越える原動力になる。これが現代にもっとも欠けているものである。

子どもが試練を蒙ったとき、子どもには母親（あるいはそれに代わるべき存在）との身体的接触が重要である。この身体的接触は乳歯が取れる時期（7歳頃）までは必要不可欠のものである。フランスでは、子どもの官能を刺激するために、異性との性的接触の引き金になるのではないかと、という一般的誤解から、子どもを退ける傾向にあったが、これは精神分析的には誤りであって、むしろ子どもから身体的接触を奪うことのほうが有害で、精神病の引き金にすらなる。日本では逆に、子どもから身体的に分離しなければならない時期になっても、まだ子どもを抱きしめる傾向にあるので、これもまたさまざまな弊害を生んでいる。

註

- (1) Françoise Dolto, *Les étapes majeures de l'enfance*, Gallimard, 1994, p.28.
- (2) Ibid., pp.30-31.
- (3) 山中哲夫「愛知教育大学教育実践総合センター紀要」第8号, 2005年, p.42.